

【問題1】 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

今日「科学」という言葉からただちに連想されるのは、おそらくコンピュータ(情報科学)、DNA(生命科学)、ミラーニューロン(脳科学)、ナノテクノロジーといった先端分野の研究成果であろう。ただし、注意したいのは、これらは二十世紀初頭の相対性理論や量子力学などの純粋な科学理論とは異なり、技術的应用と一体となった分野だということである。現代では科学と技術の境界は不分明になり、両者は融合して「テクノサイエンス」とでも呼ぶべき領域を形作っている。他方で、科学と聞いて環境破壊、核兵器、原発事故、薬害など科学技術がもたらしたさまざまな災害^①やク^Aを想起される向きも少なくないであろう。現代は「科学技術の時代」であると同時に、その「社会的リスク」をも否応なく背負わざるをえない時代なのである。

正負いずれの側面を強調するにせよ、現代社会は科学や技術の成果なしには成り立たず、またそれに伴うリスクと無関係に存立することはできない。「持続可能性(sustainability)」が時代の^②ビヨウ語となるゆえんである。科学研究と技術開発は、今日では社会システムの不可欠の一部であり、その最大のスポンサーは国家や企業にはかからない。実際、新聞やテレビで「科学」や「科学技術」といった言葉を目にしたり耳にしたりしない日は一日たりともないはずである。

ところで、その「科学」という言葉だが、文字面を眺めただけでは「科」についての「学」というのみで、その内容はいつこうに判然としない。これが物理学ならば「物(物体、物質)」の「理(ことわり、法則)」を探究する「学問」、生物学ならば「生き物」に関する「学問」といった具合に、読んで字のごとく何のまぎれもない。それに対して、「科学」の意味は誰でも理解しているにもかかわらず、改まって科学の「科」とは何かと問われれば、明確に説明できる人はむしろ稀であろう。この「科学」の自明性とわかりにくさの間には、科学の成立に関わるいささか複雑な事情がからまっている。まずはそのことを考察することから始めよう。

「科学」はもちろん英語の「サイエンス(science)」の訳語であり、そのサイエンスはラテン語の「スキエンティア(scientia)」に由来する。さらにスキエンティアはラテン語の動詞「知る(scio)」の名詞形であり、「知識」や「知」を意味するごく一般的な言葉にすぎない。フランシス・ベーコンに近代科学の精神を表す“scientia est potentia”という有名な言葉があるが、これが日本語で「知は力なり」と訳されているのも、そのためである。

このスキエンティアが英語に移入されてサイエンスと語形が変化しても、当初はその意味内容はほとんど変わらなかった。すなわち「信念(belief)」や「意見(opinion)」に対する「知識(knowledge)」の意味である。『オックスフォード英語辞典(OED)』によれば、「知っている状態または事実」を意味するサイエンスの用法は、十四世紀半ばまで遡ることができるとある。その当時、サイエンスには今日の「科学」という意味はなく、一般的な「知識」や「学問」の意味で用いられていたのである。

そのサイエンスが「知識」のうちでも「観察や実験など経験的方法に基づいて実証された法則的知識」という限定された特殊な知識、すなわち「科学」

を意味するようになるのは、時代を下って十八世紀初頭のことである。言うまでもなく、その過程には十六・十七世紀にかけて生じた「科学革命(Scientific Revolution)」と呼ばれる大きな知的変革の出来事が^③カイ在している。近代科学はこの「科学革命」の^④増嶋のなかから誕生したのである。

科学革命のさなかに書かれたホブズの「リヴァイアサン」(一六五一年)には「推理と科学について(Of Reason and Science)」と題された章があり、彼はそこで「科学は、諸帰結と、ひとつの事実への他事実への依存とについての知識であり、それによって、われわれが現在できることから、なにかほかのことをわれわれがしたいとおもうときに、あるいは類似のことを別のときにするにはどうしたらいいかを知るのである」と述べている。つまり、科学とは推論の帰結に関する知識および物事の因果関係に関する知識にはかならない。とりわけ、科学が行動の予測に役立つ知識であることを彼が指摘している点は注目に値する。そのことは、科学的知識が確実性とともに有用性をもつことを^⑤シ唆しているからである。

D 英和辞典で、“science”の項目を引くと、見出しの後に「[U] および [C] という記号が付いていることに気づかれるであろう。言うまでもなく、[U] は一つ二つと数えられない不可算名詞(uncountable noun)、『C』は数えられる可算名詞(countable noun)の略号である。サイエンスという名詞はこれら二つの用法を共にもっている。周知のように「知識(knowledge)」は不可算名詞であり、数えることができない。それゆえ、サイエンスも科学知識を表す場合には不可算名詞として扱われ、複数形は存在しない。それに対して「精密科学(exact sciences)」や「応用科学(applied sciences)」のように学問分野を表す場合には可算名詞として扱われ、複数形で表現される。言い換えれば、複数形の「サイエンスーズ」は、さまざまな学問分野から成る「個別諸科学」を意味するのである。

科学知識が次第に専門分野ごとに細分化されていき、それぞれ独自のディシプリン(学科、学問的訓練)として自立するにしたがって、サイエンスは複数形で表記されるようになる。そのような用法が一般化するのは科学の専門分化が始まる十九世紀に入ってからのことである。実際、「地質学(geology)」という言葉が使われ始めるのは十八世紀後半、「生物学(biology)」という言葉がトレヴィリナスやラマルクによって造^⑥られるのは十九世紀初頭のことである。この頃によくサイエンスは現在の「自然科学」に相当する意味を獲得し、同時にその複数形は「個別諸科学」の意味を帯びるようになる。付け加えておけば、日本語の「科学」は「サイエンス」というよりは、この個別諸科学を表す複数形の「サイエンスーズ」の訳語なのである。

ここでもう一度「科学」という文字を眺めてみよう。漢字は一般に「へん」と「つくり」から成り立っているが、「科」という文字は左側の「禾(のぎへん)」と右側の「斗」を表す「斗」から構成された会意文字である。漢字学者の白川静は「常用字解」のなかでその意味を次のように説明している。

会意。禾と斗を組み合わせた形。禾は穀類、斗は容量をはかる量器であるから、ますなどの量器で穀物の量をはかることを科という。農作物の量をはかり、その質を品定めするので、科には等級を定めるの意味がある。そのため一定の条件を考え、規定(おきて)を定めることも科という。

そうしたことから中国の官吏登用試験である「科擧」という言葉も生まれ、やがて「科」は教育の単位である「教科」「科目」「学科」なども意味するようになる。

ここまでくれば明らかなように、科学の「科」は「科目」や「学科」のことであり、科学とは「さまざまな学科や科目に分かれた学問」の意味である。古くは「分科の学」や「百科の学術」という言い方もなされていたことから、科学はそうした言葉の略称と見なすこともできる。いずれにせよ、日本語の「科学」はその成り立ちからも「個別諸科学」の意味をもっており、いわばドイツ語の“Fachwissenschaft”（専門分野に分かれた学問）に相当する言葉である。その点で、「科学」は知識を表す不可算名詞の「サイエンス」ではなく、学問分野を表す可算名詞の複数形「サイエンスーズ」の訳語なのである。このように、日本語の「科学」という言葉が「実証的知識」や「法則的知識」ではなく、はじめから「個別諸科学」の意味をもっていたことは、日本が西欧から科学を移入した時期と密接に関わっている。また、そのことは日本人の科学理解にも少なからぬ影響を及ぼしているのである。

「科学」という言葉が成立するのは、日本が鎖国を解いて欧米から知識や文物を本格的に輸入し始めた時期、すなわち江戸末期から明治初期にかけて、西暦でいえば十九世紀後半のことである。たとえば、後に文部大臣を務めた井上毅が提出した「学制意見」（一八七一年）には「語学ヲ教へ往々洋人ニ口伝シテ科学ニ涉ラシメントス」という文言が見られる。ここで「科学」は明らかに「個別の学科」の意味で用いられている。もっとも、英語のサイエンスの訳語としては、明治中期までは「科学」のほかにも「学」「理学」「実学」「窮理」などの語が当てられており、その名残りは現在でも大学の「理学部（Faculty of Science）」の呼称に見ることができるとも読み、「法則的秩序」を表す言葉であることから、法則的知識という意味では「理学」の方が不可算名詞であるサイエンスの訳語には相応しいとも言えよう。しかし、明治も末期になると、それらはほぼ「科学」の名称に統一されていく。

その一つの証拠として、明治四五年（一九二二年）に刊行された『哲学字彙』を挙げることができる。これは井上哲次郎らによって編纂された一種の哲学用語辞典であるが、その“science”の項目には「学、理学、科学」といった訳語が併記されている。ただ、その用例としては「自然科学」「経験科学」「精神科学」などの熟語が掲げられており、「科学」という語の定着ぶりを示している。また、その前年に刊行された西田幾多郎の処女作『善の研究』（一九一一年）のなかでは、「科学」「科学者」「自然科学」などの語が一貫して用いられている。その中の「現今科学の厳密なる機械的説明の立脚地より見れば、有機体の合目的発達も畢竟物理および化学の法則より説明されねばならぬ」、あるいは「科学というようなものも、何か仮定的知識の上に築き上げられたもので、実在の深遠なる説明を目的としたものではない」という文章を見れば、科学は一群の仮説から導かれた厳密な機械的説明の知識を意味しており、今日のわれわれの用法と比べてもほとんど違和感を覚えさせない。それゆえ、さまざまな変遷を経ながらも、明治末期には「サイエンス」の訳語は「科学」へと収斂して行ったと見ることができる。

それでは、いくつもの候補の中からなぜ「科学」という訳語が選ばれ、定着して行ったのだろうか。それにはさまざまな理由が考えられるが、一番大きかったのは、日本が明治維新を経て開国し、西欧から先進的知識を輸入し始めた時期に、ヨーロッパではちょうど「第二次科学革命」が進行中であったことである。この第二次科学革命は「科学の制度化」とも呼ばれているように、十七世紀に成立した近代科学が「社会制度」の中に組み込まれていた時期

にあたる。具体的には、「科学者」と呼ばれる科学研究を職業とする人々が出現し、大学の中に科学の研究教育を目的とする学部や学科が設置され、さらには科学者の職能集団である学会組織が整備されていく、といった一連の出来事が「制度化」の内実にはかならない。それは同時に、科学知識がさまざまな専門分野に分化し、個別諸科学の体系が成立していく時期でもあった。それゆえ、「分科の学」や「百科の学術」を意味する「科学」という訳語は、十九世紀半ばにヨーロッパで起こったサイエンスの専門分化にまさに対応する言葉だったのである。

このように、ヨーロッパにおいて科学が社会制度として確立され、個別諸科学がディシプリンとして体系化されつつあったちょうどその時期に、日本は西欧から科学をその研究や教育のシステムまで含めてまるごとパッケージとして移入することができた。このことは、殖産興業と富国強兵をスローガンに掲げて近代国家への道を歩み始めた明治期の日本にとっては、ある意味できわめて幸運なことであった。いわば、科学をその種子から養い育てる苦労を経ずに、その果実だけを取り入れ、存分に味わうことができたからである。しかし、その反面で、この幸運はわれわれ日本人の科学理解にある種の歪みをもたらさざるをえなかった。

ヨーロッパでは、科学はもともと「自然哲学」を母胎として生まれた知識であり、天動説と地動説の対立や、キリスト教と近代科学の軋轢に見られるように、それは宗教的迷妄に対峙する啓蒙主義的な世界観と密接に結びついていた。しかし、日本では、科学は技術と結びついた実用的な知識として、つまり世界観や自然観としてよりは、むしろ個別分野の専門的知識として、その技術的応用の側面に力点を置いて受容されたのである。そのような事情は、現在でも理学部に比べて工学部の規模が圧倒的に大きいわが国の大学制度に反映されており、また欧米から一時期（一九七〇年代）、基礎科学の分野での「日本ただ乗り論」が指摘された一因ともなっている。そのような日本人の科学理解を象徴するものこそ、サイエンスの訳語として選ばれた「科学」という言葉なのである。

（野家啓一『科学哲学への招待』より）

問一 傍線部（１）～（５）のカタカナに該当する漢字を含む熟語として最も適切なものを①～④から選び、番号をマークしなさい。

- | | | | | |
|----------|------|------|------|------|
| （１） 災ヤク | ① 厄年 | ② 疫病 | ③ 害患 | ④ 利益 |
| （２） ヒョウ語 | ① 伝票 | ② 拍子 | ③ 平等 | ④ 目標 |
| （３） カイ在 | ① 改定 | ② 再会 | ③ 界面 | ④ 紹介 |
| （４） シ峻 | ① 敵視 | ② 思量 | ③ 展示 | ④ 次第 |
| （５） 造了 | ① 誤解 | ② 語調 | ③ 加護 | ④ 後学 |

問二 傍線部A「テクノサイエンス」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 今日の科学の最先端の分野で相対性理論や量子力学などの科学理論のこと。
- ② 科学技術の時代における科学の社会的リスクに関する領域のこと。
- ③ 科学と技術的応用とが融合して一体となった科学の領域のこと。
- ④ 「持続可能性 (sustainability)」にもつづく技術開発のこと。

問三 傍線部B「科学」の自明性とわかりにくさ」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 今日では「科学」は社会システムの不可欠の一部であり、その最大のスポンサーは国家や企業にはかからないが、その「社会的リスク」例えば環境破壊・核兵器・原発事故・薬害などを背負わされてしまう不条理な面がある、ということ。
- ② 「物理学」や「生物学」という科学の分野であれば、読んで字のごとく何のまぎれもなくその学問の内実を理解することができるが、技術的応用と一体となった先端分野については、名称から学問の内容を理解するのが難しい、ということ。
- ③ 「科学」の成立には非常に複雑な歴史的な背景があるため、今日の「科学」の意味が定着するまでに紆余曲折があり、時代ごとに「科学」の意味が異なる状況を踏まえて理解しなければならない、ということ。
- ④ 「科学」という言葉は日常事近の言葉であり、誰でも理解している言葉である一方で、「科学」という文字面における「科」の「学」について明確に説明することが難しい、ということ。

問四 傍線部C「今日の「科学」という意味」の内容と一致する本文中の表現として最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 観察や実験など経験的方法に基づいて実証された法則的知識
- ② 一般的な「知識」や「学問」の意味
- ③ 「信念 (belief)」や「意見 (opinion)」に対する「知識 (knowledge)」の意味
- ④ 「知識」や「知」を意味するいく／＼一般的な言葉

問五 傍線部D「英和辞典で、“science”の項目を引くと、見出しの後に「U」および「C」という記号が付いていることに気づかれる」の内容を説明したものとして不適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 「U」は数えられない不可算名詞 (uncountable noun)、「C」は数えられる可算名詞 (countable noun) の略号で、「science」には両方の用例がある。
- ② ラテン語の「スキエンティア (scientia)」に由来する「science」は、現在も「知識」や科学知識を意味する不可算名詞の用例がある。
- ③ 複数形の「サイエンシーズ」は十九世紀の専門分化に応じて成立した、「個別諸科学」の意味を表す、「science」の不可算名詞の用例である。
- ④ さまざまま学問分野から成る「個別諸科学」を意味する複数形の「サイエンシーズ」は、可算名詞として扱われる用例である。

問六 傍線部E「会意」とは漢字の成り立ちを説明する「六書」説の一つである。以下の「六書」の解説文中の空欄

あ
え

 に当てはまる「語群」の組み合わせとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

【解説】

漢字の起源・構成の説明として、六種に分けて説明する「六書説」が行われています。物の形を写し取って漢字を構成する「

あ

」、はその代表的なもので、「月」や「魚」などの漢字がこれに当たります。字を見ればその意味が類推できます。また抽象的な概念を表す漢字は「指事」と呼ばれる構成になりますが、「上」や「

い

」などの漢字の構成を説明するものになります。意味を表す文字と音を表す文字を組み合わせる「

う

」は大部分の漢字の構成法となりますが、「江」や「河」などの漢字がこれに当たります。この構成法で作られた漢字の音読みは容易に類推できる特徴があります。「会意」は意味を表す複数の文字によって構成されたものになりますが、本文にみえる「科」のほか、「

え

」などの漢字がこれに分類されます。「会意」で構成された漢字の特徴はその文字の音の情報が含まれないため、音読みを類推することが出来ないことにあります。そのほか漢字の字義や音の転用として説明する「

か

借」と「

てん

注」があります。

【語群】

④	あ	象形	い	心	う	表意	え	信
③	あ	象形	い	末	う	形声	え	紙
②	あ	形象	い	本	う	形声	え	相
①	あ	形象	い	木	う	表意	え	武

問七 傍線部F「日本語の「科学」はその成り立ちからも「個別諸科学」の意味」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 漢字は中国から伝来した文字であり、「科」と呼ぶことになった、ということ。
- ② 「科学」の「科」は「科目」や「学科」のことであり、科学という言葉は「さまざまな学科や科目に分かれた学問」という意味であったため、可算名詞の複数形「サイエンスーズ」の訳語と考えると適合する、ということ。
- ③ 日本語の「科学」という言葉にも可算名詞と不可算名詞の用法がみとめられるものの、古くは可算名詞の意味で用いられたことはなく、基本的には不可算名詞の「科学」、すなわち「個別諸科学」の意味をもっていた、ということ。
- ④ 「科学」は明治中期に英語のサイエンスの訳語として作られた新しい語で、「学」「理学」「実学」「窮理」などの訳語の一つであったが、明治末期になると不可算名詞のサイエンスの訳語として「科学」が統一的使用された、ということ。

問八 傍線部G「いくつもの候補の中からなぜ「科学」という訳語が選ばれ、定着して行ったのだろうか」の理由を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 日本が明治維新を経て開国をした時期に、ヨーロッパでは第二次科学革命が進行中であつたので、暫定的に「科学」と訳されたから。
- ② 科学は一群の仮説から導かれた厳密な機械的説明の知識を意味していたので、明治期の日本では「科学」という訳語に収斂したから。
- ③ 第二次科学革命が進行中であつた当時のヨーロッパでは「科学の制度化」が進み、今日の「科学」の用法と殆ど同じ意味が成立していたから。
- ④ 個別諸科学の体系が成立する時期におけるサイエンスの訳語として、「科目」「学科」の「科」の意味をもつ「科学」が適合する訳語だったから。

問九 傍線部H「日本人の科学理解を象徴するものこそ、サイエンスの訳語として選ばれた「科学」という言葉なのである」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 「自然哲学」を母胎とする科学的知識という背景を持たない日本語の「科学」という言葉は啓蒙主義と結びついて成立した、ということ。
- ② 日本人の科学理解はまさに「科学」という言葉をサイエンスーズの意味としてサイエンスの訳語に応用した点に象徴される、ということ。
- ③ 基礎科学の分野での「日本ただ乗り論」が象徴するように、日本の「科学」は、個別諸科学の技術的应用としての「科学」であつた、ということ。
- ④ 日本では理学部に較べて工学部の規模が圧倒的に大きいが、この状況は日本の大学制度における「科学」のありようを象徴している、ということ。

問一〇 次のイ～ニについて、本文の内容と合致するものには①、合致しないものには②を、それぞれマークしなさい。

- イ 現代社会は、科学や技術の成果なしに成り立たず、またそれに伴うリスクと無関係に存立できない状況にある。
- ロ 十四世紀半ばまでの「サイエンス (science)」には一般的な「知識」や「学問」の意味に加えて今日の「科学」に相当する意味も確認できる。
- ハ 科学知識が専門分野ごとに細分化されてき、それぞれ独自のディシプリン (学科、学問的訓練) として自立するに従って、サイエンスは複数形で表記されるようになるが、そのような用法が一般化するのには十九世紀以降である。
- ニ 西田幾多郎の『善の研究』には、科学を一群の仮説から導かれた厳密な機械的説明の知識という意味で使用していることが分かるが、それは「実在の深遠なる説明を目的としたものではない」とも述べており、当時の「科学」の理解の限界も記されているのである。

【問題二】 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

明治期を通して、最も高名な日本研究者の一人にイギリス人のバジル・ホール・チエンバレンがいる。彼は明治六年（一八七三）二二歳のときお雇い外国人として来日し、後に東京帝国大学名誉教師となる。「古事記」の完訳を行ったことでも知られる。

「古い日本は、妖精^{ようせい}の住む小さくてかわいらしい不思議な国であった」（『日本事物誌』）

彼は日本滞在が長くなった後年、若いころ見聞^{けん}したことを振り返って、「古き良き日本」（原文は Picturesque old Japan など）という言葉をよく使った。明治のはじめごろの日本には、西欧文明が出合ったことのないお伽^{おとぎ}の国のような姿、「古き良き日本」があったとチエンバレンは述べる。

チエンバレンに限らず、日本に長く滞在し日本と日本人を深く理解していた西欧人たちにとって、それは確実に実感されていた。彼らはいろいろと書き残している。

幕末期、初代英国駐日総領事となったラザフォード・オールコックも、江戸の町を評して、見たこともないほどの美しい光景に包まれた町だと絶賛する。「市街は、湾の青い海のところまでのび出ているが、その湾上には奇妙な帆装をした小舟（ボート）や船（ジャンク）が一面に浮かんでいる。ヨーロッパでは、これほど多くのまったく独特のすばらしい容貌^{ようぼう}を見せる首都はない」（『大君の都——幕末日本滞在記』）

こう海辺の美しさを語る。城下から郊外にかけても、

「官庁街の城壁沿いの道路や、そこから田舎の方向に向かって走っている多くの道路や並木道には、ひろびろとした緑の斜面とか、寺の庭園とか、樹木よくしげった公園とかがあって、目を楽しませてくれる。このように、市内でも楽しめるような都市はほかにない」

神奈川方面に出かけたときなどは、「自分の農地を整然と保っていることにかけては、世界中で日本の農民にかなうものはない」ともいう。町並みや自然の光景だけではなく、日本人の行動や暮らしも外国人の目をみはらせた。明治二年（一八七八）、外国人未踏の地だった東北から北海道へと旅したイギリスの女性旅行家イザベラ・バードの『日本奥地紀行』での著述がよく知られている。彼女は、旅の途中、物珍しさから部屋を覗き見され無慮^{むりょ}な視線に閉^{（一）}コウしたり、旅館の自室でノミや蚊の大量に襲^襲わながらも、しばしば民衆の無償の親切や助け合いの場面に当たって深く感銘を受けている。そうした人々の暖かさになれることは、彼女にとって旅の途中の不愉快な出来事を補ってあまりあるものだった。

「ヨーロッパの国の多くでは、またたぶんイギリスでもどこかの地方では、女性がたったひとりでよその国の服装をして旅すれば、危険な目に遭うとまではいかなくとも、無礼に扱われたり、侮辱されたり、値段をふっかけられたりするでしょう。でもここではただの一度として無作法な扱いを受けたことも、法外な値段をふっかけられたこともないのです」（イザベラ・バードの日本紀行）

「ここでは」とは福島県会津^{あづま}地方をはじめとする田舎での話である。バードは東京や横浜などの都会では狡猾^{ずるがしこ}い日本人に逢^あっているのだが、田舎での体験を振り返って、日本人の実直さをやや誇張^{くわちやう}ぎみに描写するのを a。彼女が東北・北海道への旅を終えて関西へと向かった際は、今の奈良県桜井市の三輪^{さんりん}で三人組の人力車夫に出合う。彼らから、

「伊勢^{いせ}神宮へお参りして京都までの一〇日間、車夫として自分たちを雇ってほしい」と頼まれた。このときバードに同行していたイギリス人女性（日本語を話せるギユウリック夫人）が、

「あなたたちは推薦状をもっていないし、途中で放り出したり酒を飲み過ぎて走れなくなったりするかもしれない。人^{（二）}ガラが分らないから雇えない」と断ると、車夫たちは、

「死ぬまで忠実でいる。酒には手を出しません」と熱心^{ねっしん}にいう。バードは彼らの、

「わたしたちも伊勢に参りたいんです！」

という言葉に b、体の弱そうな一人を除いて二人を雇おうと伝えると、二人は、「ひ弱な車夫には大勢の家族があつてとても貧しい。それで助けてやりたいのです」とその車夫のためにアイ願^{（三）}してきた。それでとうとう三人とも雇うことにした。彼らは実に嬉^{うれ}しそうにして、その後最初に誓ったとおりあくまで温厚で律儀で感じがよく、おかげで旅は快適なものとなった。バードは仲間を思う車夫たちの行動に感じ入った。

チエンバレンが、日本には、「貧乏人は卑下^{あへ}しない。A。実に貧乏人は存在するが、貧困なるものは存在しない」と観察したのも、庶民の間で仲間を大切に
する意識、相互扶助の精神が存在していたことを示している。

大森貝塚を発見したことで知られるアメリカ人のエドワード・S・モースも、明治一〇年、日光を訪ねたときに通った栃木県の寒村の様子を、「人々は最下層に属し、粗野な顔をして、子供は恐ろしく不潔で、家屋は貧弱であったが、然し彼らの顔には、我国の大都市の貧民窟^{ひんかく}で見受けるような、野獣性も悪性も、また憔悴^{せうすい}した絶望の表情も見えなかった」（『日本その日その日』）と述べる。

もちろん古き日本には、醜悪な面も多かったろう。封建的な悪習、悪政、男尊女卑、理不尽な家父長制や身分制度、衛生観念の欠如、残酷な事件、そして様々な差別など。これらも実例を引用していけばいくらページがあっても足りない。バードも旅の途中、ほとんどの人が皮膚病をはじめあらゆる種類の病に冒されている村落を目にしている。だがそれら以上に外国人にとって驚きだったのが、人々が助け合う日常の姿だった。

物が盗まれることのないことにも、数多くの外国人が驚いている。モースは、

「人々が正直である国にいることは実に気持ちがいい。私は決して札入れや懐中時計の見張りをしようとしな。錠をかけぬ部屋の机の上に、私は小銭を

置いたままにするのだが、日本人の子供や召使は一日に数十回出入しても、触ってはならぬ物には決して手を触れぬ¹」

という。また賄賂は日本武士道の誠の心に反するものとして、その悪習にふれることがなかったことにも、何人もの外国人が感銘を受けている。

日本人為政者が、外国人に日本の恥部をなるべく見せないよう行動エリアに制限をかけたことが、好印象を抱かせるうえで効果を上げたこともあるだろう。だが欧米人が目をみはる、異質な文明をもった人々の心のありようが、アジアのはずれのこの島国に少なからず存在した^B。彼らはそれに驚き、数多く書き残した。この点はまぎれもない事実である⁴。

ちょうど同時代の中国が、アヘン戦争に敗れ退ハイの極みにあったことも、日本を印象づけるうえで大きかった。中国は賄賂が横行する社会だった。オーロコックは自分の前任地だった中国を「あらゆるものが朽ちつつある」とし、それに比べて日本への賛辞を送る。この時代日本にやってきた欧米人の多くは官僚、学者、旅行家であり、異文化をいくつも体験してきている。経験豊かな彼らの目に、日本が賞賛に値する国に映ったとしたら、それはそう感じさせる何かが確実にあったはずだ。

いっぽう、こうした外国人らと同時代を過ごした日本人で、昔の社会、生活、風俗を振り返り、「古き良き日本」と述べた者はほとんど見かけない。少し時代が下って永井荷風など一部の文学者くらいだろう。

過去の日本とはどんなものだったか、現代のわれわれはそれを誤解なく想像できているだろうか。幕末期以降の日本の姿は写真で見ることができ。文字に書かれたものも含め、われわれは当時の街の姿、自然風景、風俗、人情の一端を知ることができる。だがそれで全体を正しく理解できるわけではない。写真といっても、珍しいものを取りわけ選んで撮ったものかもしれない。写真を見てわれわれが日常の姿と感ずるものは、実は日常ではないよそ行きの姿の可能性もある。

やっかいなのは、「古き良き日本」というものが、徐々に失われていったものではないかもしれないことである。たとえば幕末や明治初期にはそれが色濃く太くあり、明治後期から昭和戦前と時が経るにつれて、しだいに薄く細くなってくるといったものではなく、一度その文化のほとんどが消滅し断絶しているようなのである。

チェンバレンは、明治三十八年（一九〇五）の『日本事物誌』第五版の序論において、西洋的近代化が日本社会に浸透してきたことを受け、一八七三年に日本についた筆者は、（三〇年以上経った現在）もう四〇〇歳にもなったような気持ち^Dであり、「近代日本の大変革を表面から下まで潜って研究した者」として、「古い日本は死んで去ってしまった」と書く（カッコ内は引用者による補足）。チェンバレンが武士社会の消滅をもって古い日本は死んだと述べているのではないことに注意しておきたい。政治形態や統治形態ではなく、日本人の心性、生活様式全体の消滅を指しているのである。

明治・大正時代の外国人だけでなく、日本近代史家の渡辺京二も『逝きし世の面影』（一九九八年）において、チェンバレンらという古い日本、すなわち一八世紀初頭から一九世紀にかけて日本に存在した一つの文明が、明治半ばには消滅したと指摘する。同書は、幕末から明治にかけての外国人の日本に

対する膨大な量の著作をもとに多くの引用を⁵使しながらこの特異な文明の滅亡を浮かび上がらせたものである。ここでは、同書で短く指摘する文化人類学的側面についてだけ述べておきたい。

「滅んだ古い日本文明の在りし日の姿を偲ぶ^Eには、私たちは異邦人の証言に頼らねばならない。なぜなら、私たちの祖先があまりにも当然のこととして記述しなかったこと、いや記述以前に自覚すらしなかった自国の文明の特質が、文化人類学の定石どおり、異邦人によって記録されているからである」

自分たちの文化の特徴は当り前のこととして意識されにくいので、あまり記述されない。異邦人にとってはその文化が印象的なので、彼らはそれを記述する。したがって一つの文明を読み解くには異邦人の記述が重要だと文化人類学では教える。

この考えでいけば、古き日本の良さについて当時の日本人は自覚していなかったことになる。

それにしても来日した西欧人たちは、なぜあんなに「古き良き日本」にこだわり、伝統文化が失われたことを嘆いたのだろうか。それは一つの文明を消滅させた日本人への関心だけでなく、^F西欧人自身の問題意識が大きかったためだろう。イギリスの歴史学者ホブズボウムは『創られた伝統』で次のことを指摘している。一九世紀末（明治時代半ば）―第一次世界大戦（大正初期）までの三、四〇年間は、西欧諸国においてナショナリズムがとくに高まり、そのための民族的アイデンティティが強く求められた時代だった。ナショナリズムを謳う人たちにとっては、民族の特性をはっきりと示すための「伝統的なもの」が必要だった。スコットランドで現在よく知られているタータンチェックやキルトなどは、伝統の象徴とするためにこのとき採り出された『創られた伝統』であるという。

産業革命に端を発する近代文明は、西欧社会に画一化を促し、伝統を失わせた。いくら経済力や軍事力があっても手にすることできない伝統というものを保持している日本は、羨ましい存在だった。だが日本はそのときまさに伝統を捨て去ろうとしていた。なんともたいなく愚かなことをしているのか！

西欧知識人の中には、近代文明に対して閉塞感、不信任を感じている者も少なくない。「古き良き日本」を礼賛することは、その対極にある西欧近代文明への批判そのものといえた。

お雇い外国人として来日したドイツ人医師、エルヴィン・フォン・ベルツも、明治の世になっても武士道を受け継ぐ大名子弟の冷静さや礼儀正しさに感心する一方、日本の伝統を価値のないものとする多くの日本人に強い口調で^C。

「なんと不思議なことには現代の日本人は自分自身の過去については、もう何も知りたくはないのです。それどころか、教養ある人たちはそれを恥じてさえいます。いや、何もかもすっかり野蛮なものでした」とわたしに言明したものがあ（中略）その国土の人たちが固有の文化をかように軽視すれば、かえって外人のあいだで信望を博することにもなりません」（『ベルツの日記』）

ベルツは、自分たちの歴史をどうでもいいように扱う人間など、信頼できないというのである。当時の西欧人には、前記のように自分たちの「伝統を擁護」しなくてはならない理由があった。いっぽうで日本人には、外国と対等にわたりあうため富国強兵を推し進め、封建時代からの「伝統を壊す」必要が

あった。その相違がぶつかりあった時代での見解の相違である。

このことは、外国人と日本人との間で、日本の魅力に対する感じ方、ギャップの根深さを浮かび上がらせているように思える。

(内田宗治『外国人が見た日本』より)

問一 傍線部(1)～(5)のカタカナに該当する漢字を含む熟語として最も適切なものを①～④から選び、番号をマークしなさい。

- | | | | | |
|---------|------|------|------|------|
| (1) 閉コウ | ① 口伝 | ② 功德 | ③ 余興 | ④ 抵抗 |
| (2) 人ガラ | ① 卵殻 | ② 横柄 | ③ 唐突 | ④ 架空 |
| (3) アイ願 | ① 出藍 | ② 曖昧 | ③ 溺愛 | ④ 悲哀 |
| (4) 退ハイ | ① 配達 | ② 敗北 | ③ 廃業 | ④ 先輩 |
| (5) ク使 | ① 駆動 | ② 工面 | ③ 真紅 | ④ 病苦 |

問二 空欄 a c に当てはまる表現として最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- | | | | | |
|------|------------|-------------|-------------|------------|
| 空欄 a | ① 甘受した | ② 禁じ得なかった | ③ 大目に見た | ④ 一言も無かった |
| 空欄 b | ① 怒り心頭に発して | ② 襟を正して | ③ ほだされて | ④ 胸が騒いで |
| 空欄 c | ① 軍配をあげている | ② 二の舞を演じている | ③ 警鐘を鳴らしている | ④ 煙幕を張っている |

問三 傍線部A「実に貧乏人は存在するが、貧困なるものは存在しない」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 人々は最下層に属し、粗野な顔をして、子供は恐ろしく不潔で、家屋も貧弱で、当時の日本は相当に貧乏であった、ということ。
- ② 当時の人々は貧しかったが、相互扶助の精神が存在したことで、貧しいことによる人間性の崩壊は見られなかった、ということ。
- ③ 古い日本には、封建的な悪習や、衛生観念の欠如、様々な差別が存在したが、これは貧困が原因ではなかった、ということ。
- ④ 当時の人びとは驚くほどあらゆる病に冒されていたが、それは貧乏でなくても解決できる問題ではなかった、ということ。

問四 傍線部B「彼らはそれに驚き、数多く書き残した」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 当時の日本人は驚くほど貧しかったが、正直で子供や召使も触れてはならぬ物には決して手を触れないなど、物が盗まれないということについて欧米人たちは深く感動をして記録に残している、ということ。
- ② 幕末から明治期の日本には日本武士道の誠の心として「賄賂」という悪習がなかったことは、「賄賂」が横行していた中国との比較から、欧米人たちに大きな驚きをもって報告されている、ということ。
- ③ 当時の日本の為政者たちが、外国人に日本の恥部を目撃することがないように、行動エリアに制限をかけたことで、日本に対する好印象を与えることに成功していることを記録している、ということ。
- ④ 幕末から明治期に来日した欧米人たちが、アジアの島国に異質な文明をもった人びとの心のありように驚きを感じ、感銘を与えられたことを多くの著作の中に記している、ということ。

問五 傍線部C「永井荷風」について、(あ)「代表作品」と、その創刊に関わった(い)「文芸雑誌」として最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- | | | | | |
|----------|------------|---------|---------|-----------|
| (あ) 代表作品 | ① 『ふらんす物語』 | ② 『其面影』 | ③ 『細雪』 | ④ 『田園の憂鬱』 |
| (い) 文芸雑誌 | ① 『早稲田文学』 | ② 『白樺』 | ③ 『新思潮』 | ④ 『三田文学』 |

問六 傍線部D「古い日本は死んで去ってしまった」の内容を説明したものとして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 明治以降の近代化に伴って、武家社会が消滅してしまったことで日本武士道の誠の心が完全に崩壊し、西洋的近代化が日本社会に浸透することで、西洋流の価値観がそれに取って替わってしまった、ということ。
- ② 古い日本とは、幕末から明治期に来日した欧米人たちが目撃した当時の日本人の心性や生活様式全体のこと、これらが近代日本への大変革を経て、そのありようのほとんどが消滅し、断絶してしまった、ということ。
- ③ この表現は「古き良き日本」の伝統が失われたことを外国人であるチェンバレンの目を通して捉えたものであるが、実際は明治後期から昭和戦前にかけて徐々にその崩壊が進むので、先見の明のある指摘であった、ということ。
- ④ チェンバレンのいう「古い日本」とは「妖精の住む小さくてかわいらしい不思議な国」であったが、長年日本に暮らしたことで日本の醜悪な面に接したことで「古き良き日本」が幻想に過ぎなかったことを自嘲的に表現した、ということ。

問七 傍線部E「一つの文明を読み解くには異邦人の記述が重要」の理由として最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 異文化をいくつも体験している経験豊かな官僚、学者、旅行家には賞賛すべきものを正しく記述することができるから。
- ② 古い日本の文化であっても現代の日本人には分からないことがあるので、私たちの先祖が残した記録がとても重要になるから。
- ③ 自分たちの文化の特徴は当たり前のこととして意識されにくいのが、外国人にとってはその文化が印象的なものでそれを記述するから。
- ④ ある特定の文明を理解するにはその文明の発生から滅亡までの詳細な記録が必要で、その記録こそ文化人類学者の重要な任務であるから。

問八 傍線部F「西欧人自身の問題意識」の内容を説明したものととして最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 当時の西洋諸国に存在した伝統文化とは根本的に異なる日本文化における「古き日本の良さ」への憧憬があり、それを当時の日本人が全く自覚していないことに対する忤怛たる思いにより、古い日本の文明の滅亡を予感していた、ということ。
- ② 当時の西洋諸国ではナショナリズムの台頭があり、民族的アイデンティティが強くもとめられていたため、民族の特性をはっきりと示すための「伝統文化」が失われることへの批判と、伝統を失わせる西洋近代文明への批判があった、ということ。
- ③ 当時の西洋諸国では、民族の文化としての「伝統文化」を新たに創り出さねばならない状況にあり、それは「創られた伝統」と称すべきものであったが、日本の伝統文化は本物の伝統文化であったため、西洋の知識人たちは嫉妬した、ということ。
- ④ 当時の日本人たちが日本の伝統を価値のないものとして発言しているのに対して、明治の世になっても武士道を引き継いでいることの矛盾があり、そのような態度は自国の文化の軽視と理解されるため、外国人の間では信頼を得ることはできない、ということ。

問九 傍線部G「外国人と日本人との間で、日本の魅力に対する感じ方、ギャップの根深さを浮かび上がらせている」の内容を説明したものととして、最も適切なものを次の①～④から選び、番号をマークしなさい。

- ① 西洋人における「古き良き日本」とは、町並みや自然の光景だけでなく、日本人の行動や暮らしを含む概念であった、ということ。
- ② 当時の日本人は「貧乏」ではあったが、西洋人たちはそれを「貧困」と区別するような鋭敏な問題意識があった、ということ。
- ③ 外国人にとって「古き良き日本」と映った日本の「伝統文化」は、あくまでも外国人の理解する日本の幻像であり、実際の日本には醜惡な側面もあり、封建時代の悪習も残っていることを日本人は自覚していたという、幻想と現実の相違があった、ということ。
- ④ 当時の日本人にとって「伝統文化」は外国と対等にわたりあうためには壊すべき封建時代からの伝統とされ、一方の外国人にとっては日本の民族のアイデンティティのために守るべき伝統とされ、両者には「伝統文化」に対する見解に隔たりがあった、ということ。

問一〇 次のイ～ニについて、本文の内容と合致するものには①、合致しないものには②を、それぞれマークしなさい。

- イ チェンバレンは、日本には西洋文明が出合ったことがないお伽の国のような姿、「古き良き日本」があったと述べている。
- ロ イザベラ・バードは日本の国内旅行をしたイギリス人女性旅行家で、一人での快適な伊勢神宮への旅行を楽しんだことが知られる。
- ハ 過去の日本を知る上で、幕末期以降の日本の姿は写真で見ることができるので、当時の街の姿、自然風景、風俗、人情の一端を知ることができると、その写真が必ずしもその当時の日常を写したものであるのではない、その写真から当時の全体を理解できるわけではない。
- ニ 現在よく知られるタータンチェックやキルトなどは、民族の特性をはっきりと示す「伝統文化」であり、西洋諸国の近代において失われつつあった「伝統文化」でもあったが、西洋諸国におけるナショナリズムの高まりによって残ることができたのである。